

書簡集にみるジョルジュ・サンドの衣生活

—男装と女性性との関係—

新 實 五 穂

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)

原稿受付平成 14 年 9 月 5 日；原稿受理平成 15 年 5 月 12 日

George Sand's Clothing Life in Her Collection of Letters

—The Connection between Her Dressing as a Man and Female Character—

Iho NIMI

Doctoral Research Course in Human Culture, Ochanomizu University, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610

George Sand (1804-76) is recognized as a beauty in male attire as well as a French female romantic novelist. The purpose of this thesis is to find out the reason behind her disguising herself. The methodology used is to pick out and examine the sentences mentioning clothes in her letters collection. There are several different ways in which she uses masculine disguise, and the author focuses on when she uses disguise for political activities as a republican ideologist in 1835. In her masculine disguise, there is a feature that was neither a male imitation nor an expression of female character. Her male attire can be related to her usual, simple female attire which had no affectation and no vanity, and was not intended to flatter. Viewed in this light, we must pay close attention to the connection between her dressing as a man and the thought of liberating women.

(Received September 5, 2002; Accepted in revised form May 12, 2003)

Keywords: France フランス, 19th century 19世紀, George Sand ジョルジュ・サンド, cross-dressing 異性装.

1. はじめに

ジョルジュ・サンド (1804-76) は、フランス・ロマン主義文学を代表する女流作家である。「物書き牝牛」と呼ばれ、ベリー地方^{*1}の農民の姿を写實的に描いた田園小説を始めとする多くの作品を世に送り出した。しかし、サンドは、その作品以上に、ミュッセ (1810-57) やショパン (1810-49) の恋人、フェミニズムの先駆者、男のペンネームを使う女流作家そして男装の麗人として知られている。中でも、男装は、1839年10月15日付の『現代諷刺新聞 Aujour'hui Journal des ridicules』(図1)、42年の『シャリヴァリ』紙(図2)などで諷刺画にもなった。

サンドの男装については、カレーニン¹⁾やモロワ²⁾が既に次のことを指摘している。4歳の時に母親が軍服を着せたのを始まりとして、思春期の頃、狩や乗馬

をする際に男物の衣類を身に着けたこと、1830年代を中心とするパリでの男装が、経済的理由、自己の知的好奇心を満たすため、訴訟期間中の裁判所や上院議会、新聞社などの男性しか出入りできない場所に立ち入るためであったこと、旅行着として度々男装を用いたことである。ただし、カレーニンが、サンドの男装を経済性と実用性に基づいたものとしているのに対し、モロワは、彼女が「男性としての独立を得たいと常に願っていた」³⁾気持ちや「女性の奴隷状態から解放された」⁴⁾ことを重視している。また、『ジョルジュ・サンドはなぜ男装をしたか』⁵⁾を著した池田によって、サンドの美意識や服飾観からの考察もされている^{*2}。

本論では、収録書簡数約 20,000 通、収録人名

*1 パリ盆地と中央山地の間、ほぼシェール県とアンドル県に相当する旧州で、中心都市ブルジュ。サンドはパリで生まれたが、育てられたのは、父方の実家があったベリー地方ノアンである。

*2 池田の論考は、他に次のものがある。池田孝江：ジョルジュ・サンドにおけるコスチューム 1-3, 衣生活, 256-258 (1985), 池田孝江企画：『ジョルジュ・サンド展：愛と真実を追い求めたロマン派を代表する女流作家』, 西武美術館, 東京, 16-18 (1989), 「ジョルジュ・サンドのコスチュームと演劇の周辺」

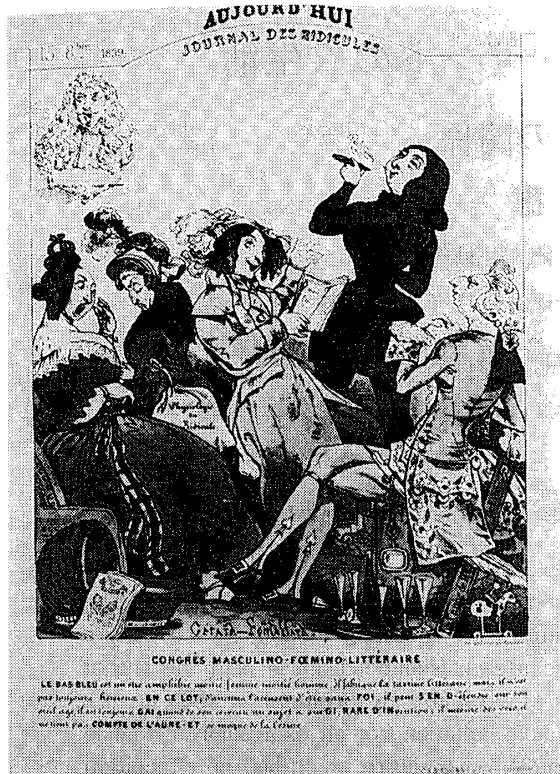


図1. ジェラルール・フォンタラール Gérard Fontallard が、1839年10月15日付の『現代諷刺新聞 Aujourd'hui Journal des ridicules』のために制作した石版画《男性と女性の文学会議 Congrès Masculino-Fœmino-Littéraire》

2,000人を越えるジョルジュ・リュバン編纂の『ジョルジュ・サンド書簡集』(全26巻)⁶⁾から、サンドが衣服に関して述べた書簡を主に使用し、男装の全容を明らかにすることを目的とする。なぜなら、先述した池田の著書では、男装の全容が示されていないからである。1995年に書簡集の最終巻が刊行された結果、全ての書簡集を概観して、この時代は、サンドが男装をする理由の何にあたる時代なのかを考察することがより容易になったのである。

特に、彼女の思想に従って、共和主義者としての政治活動に活用されたパリでの1835年の男装に着目する。そして、政治活動に活用されながらも、サンドの男装が、男性の模倣ではなく、女性性を表出しないことを心がけて行われた事象であり、「男性として注目されないためには、女性として注目されない習慣をつけなければならない⁷⁾と彼女が述べたように女性性についての詳細な知識に裏打ちされた上で成り立っていた事象であることを示す。



図2. アルシッド・ローレンツが、1842年に『シャリヴァリ』紙のために制作した版画《滑稽な鏡 Miroir Drolatique》

2. サンドと男装

これまで、サンドの男装は、エピソードの豊富な自伝『わが生涯の歴史』⁸⁾を中心に考察されてきた。しかし、1855年には書き上げられているため、76年に没するまでの彼女の全生涯を把握できないこと、先祖や幼年期の思い出に関する記述と比較して、時が下るにつれて内容が乏しくなっていくことが問題になる。加えて、どのくらいの値段で、どのような材質の布地を使い、誰に衣服を仕立ててもらっていたのかなど具体的なことを明らかにできない。それらを補うには、1812年から76年にわたるサンドの書簡^{*3}が有効である。

サンドが男装に関して述べた書簡は、五つに大別できる。1820年代のベリー地方ノアンでの狩や乗馬をする際の男装、30年代のパリでの男装、旅行時の男装、男性服の注文、娘の男装に関するものである。ノ

*3 書簡自体の特徴は、書簡集各巻の序文と以下の論文を参照。Georges Lubin (Études réunies et présentées par Béatrice Didier et Jacques Neefs): *George Sand Écritures du romantisme II*, Presses Universitaires de Vincennes, Saint-Denis, 25-38 (1989)

書簡集にみるジョルジュ・サンドの衣生活

アンでの男装が純粋に機能性と結び付き、旅行時の男装がフランス革命の頃ほぼ習慣になっていたとの指摘⁹⁾もある以上、彼女の男装の特徴は、男装が一時的なものではなく、長い間続いたことと30年代のパリで最も頻繁に行われた男装が、共和主義者としての政治活動や思想に関係していたことだと思われる。まずは、男装の全容を示し、その後、パリでの男装について明らかにする。

先述したようにサンドの男装は、母によって軍服を着せられた4歳の時に始まる。士官である父にスペインへ会いに行き、そこで父の上官、ミュラ将軍(1767-1815)の機嫌を取るためであった。そして、医学の知識を持ち、サンド以前に男性しか教育したことのない家庭教師によって勧められた思春期の男装は、彼女がリュウマチで運動を必要としたために、一層敢行された。次に、結婚生活が上手くいかず、1831年にパリへ上京した際の男装が位置するのだが、自伝には、パリでの男装の記述において、次のような一文がある。「男装したのは、人生の中で、思いがけない、つかの間の時間である。数年いや後に10年も私が男性服を着たと皆は言ったが、まだ髭の生えていない息子は、よく私に間違えられた」¹⁰⁾と男装が一時的であったことをサンド自身が訴えるものである。しかし、彼女の男装は、「思いがけない、つかの間の時間」で終わったものでもなければ、これまで考えられてきたように「1860年頃からすっかり男装をやめた」¹¹⁾わけでもない。

サンドが最後に男性服を注文した書簡は、ノアンで1850年9月20日頃にユルシュル・ジョー(1803-81)へ宛てたもので、ズボンやスモック^{*4}などを作るためである¹²⁾。ユルシュルは、サンドの祖母の使用人だった人の姪で、幼年期の遊び仲間であった。サンドの衣生活を女物と男物の両面から最も長い間支え続けたのは、ユルシュルである。ペリー地方ラ・シャトルで暮らすユルシュルには、パリと比較して安く、速い仕事、サンドと同じ背丈のため、採寸の時間が短縮できる、長いシャツの裾を使い、新たなカフスを作ってもらったといった融通が利くなどの利点があった。男性服の注

文が50年に最後となるのは、48年の二月革命における政治活動での挫折を経て、この頃から用事がある時にだけ短期間パリへ上京するようになり、生活の比重がノアンへと移行したためであろう。

また、1860年代末から70年代初めの書簡には、ジレ gilet という単語が時折現れる。ジレとは、現在の三つ揃いの原型となった上着、ズボン、ヴェストのヴェストのことを意味する場合が多い。しかし、ここでのジレは、フランネルやニット製で、袖が付いているものもあり、多くは肌の上に直接身に着ける防寒着としての男性用下着を指している。これを男装に加えるならば、ほぼ全生涯にわたりサンドは男装をしていたことにもなるだろう。

3. 共和主義者としての男装

パリでの男装は、経済的理由から、自伝では母¹³⁾、1831年3月4日の書簡では息子の家庭教師ジュール・ブーコワラン(1808-75)¹⁴⁾と違いはあるものの、忠告に従って始まった。35年になると、共和主義者の旗頭で、その雄弁さでフランス中の話題であった弁護士ミッシェル・ド・ブールジュ(1797-1853)や仲間たちと共に夜の散歩をする際、次のような記述がある。「たくさんの男性と一緒にいるたった一人の女性として注目されないため、時々、男性服を再び身に着けた」¹⁵⁾と自発的に男装を選んだことや人目を引いてしまう女性性を隠す目的があったことをサンドは明かしている。彼女が共和主義者としての政治的立場を取るようになったのは、ブールジュの強い影響を受けた結果であり、夜の散歩も群衆の発言や動向に耳を傾けたり目を向けたりするためのものであった。言論への弾圧が激しくなるパリで、彼を支援する生活を送る中でサンドの男装は、共和主義者の一人として政治活動をするためのものである。この男装が、女性の出入りを禁じる上院議会で、35年5月にブールジュの弁論を聞くために、当時流行の男性服であるフロックコート¹⁶⁾を身に着けることを導き、上院議員のドカズ公爵(1780-1860)に議会への入場許可書を請願する以下の書簡を生むのである。

あなたの恩恵を望んでいます。明日、私を議会に入れて下さい。今日、入場券を持っていましたが、私のフロックコートは、認められませんでした。それで、あなたのお名前を厚かましくも引き合いに出し、私は入ることができました。もし、親切にも二枚の入場券を送って下さ

*4 1834年パリの消防士ポーラン Paulin が考案した綿布の上っ張り、衣類保護のため、他の衣服の上から身に着けた。労働者や芸術家が仕事に用い、青色や灰色のものなどがあつた。38年3月24日のサンドの書簡には、「レースのスカーフ fichu よりも亜麻布のスモックをよく身に着けています」との記述がある。George Sand: *Correspondance t. 4*, Classiques Garnie, Paris, 376 (1968)

るならば、明日も同じように議会に行きたいのです。あなたのどんなご好意も受ける権利を私は持っていません。それでも、この機会に思い切ってお願ひします¹⁶⁾。

社会的制約とだけ捉えられている上院議会での男装だが、共和主義者として政治活動をする時点で、既に男物の衣服をサンドは身に着けていた。さらに、パリで1835年5月6日にサン=シモン主義者で、新聞記者の友人アドルフ・ゲルー(1810-72)^{*5}へ宛てた書簡から、35年の男装は、共和主義の思想を投影したものであったことがわかる。

ゲルーのサン=シモン主義とは、社会改革思想家サン=シモン(1760-1825)の教義から派生し、七月革命前後に絶頂期を迎えた社会思想である。相続財産の廃止、労働者と女性の解放、「社会主義思想を持って、資本主義体制の確立」¹⁷⁾などを目指して、ヨーロッパ各国に思想的影響を与えた^{*6}。サンドとゲルーの親密な交流は1833年の夏に始まるが、35年に共和主義者とサン=シモン主義者という互いの思想の違いで言い争いが生じた。そのような中、ゲルーは、男装によって、女性でも男性でもない存在にサンドが陥ってしまうことを危惧し、彼女の男装を非難した。一方、サンドは、ゲルーの書簡の気に入らない部分に下線を引いて、即座にそれを5月6日の反論の書簡と共に彼へ送り返すのである。サンドは、男性服を着ても自分の生活には全く変化がないだろうと述べ、友達ならば恰好にとらわれず、常に変わらぬ態度で自分に接するべきだと訴えている。次に書簡の一部を引用する。

机に向かう時、私が着るであろう衣服は、仕事にとって少しも重要ではありません。友達なら、ドレスを着ていようと上着を着ていようと、私を尊重してくれると思っています。ステッキを持たずに男装して外出することはない

ので、安心して下さい。ついでに何日か青年共和主義者の服装を身に着けるといふ発想によって、私の生活に大革命は起きないでしょう¹⁸⁾。

サンドは、男装を「青年共和主義者の服装」と呼んでいる。青年共和主義者 bousingot とは、七月革命後、ブルジョアに対抗して行動を起こした共和派の青年たちを指し、1832年と35年の暴動で主に活躍した。彼らは服装で識別され、フランス革命期の政治家マラー(1743-93)風のジレにジャコバン派の指導者ロベスピエール(1758-94)風の髪型、青年共和主義者の呼び名にもなったブーザンゴという水夫用エナメル塗り革帽子を身に着け、過去の偉大な革命家たちの装いを取り入れることで大革命が起こることを心から信じていた^{*7}。

サンドには、一日のうちで女性服と男性服を自由に着替え、長い間、男物の衣類を日常的に用いた経験が存在している。その男装経験の中で、1835年のパリでの男装は、女性性を表出しないという目的に端を発し、共和主義者としての政治活動に活用されると共に、彼女の思想を投影するものへとなっていった。また、この頃、サンドが共和主義の立場をより明確化した背景には、男装を含め、彼女の思想を度々非難したサン=シモン主義者ゲルーへの反論の書簡が存在していたことも付け加えておかなければならないだろう。

4. サンドの女性服

サンドは、男装の麗人として有名にもかかわらず、彼女が衣服に関して述べた書簡^{*8}の大半は、仕立屋へ女性服を注文するもの、友人や使用人に買ってもらいたい女物の衣類を言付けるものである。このことは、男装が、衣生活の中心にはならなかった事実を伝えている。

サンドが衣服に関して述べた書簡は、1810年代には1通もなく、20年代も数通で、30年代から多く見られるようになり、70年代まで続いていく。数量的には、200通あまり、すなわち全書簡の1%に過ぎな

*5 政治経済や音楽に該博な知識を持ち、『タン』、『デバ』、『プレス』紙など数々の新聞に執筆した。サンドは、ゲルーに父親代わりとして子供たちの面倒をよく見てもらった。彼らの書簡の交流はゲルーが亡くなるまで続くが、仲が一時険悪になった。ゲルーが特派員として海外に赴任したなどの理由で、1837年から57年まで途絶えている。

*6 サン=シモン主義については、以下の書物を参照。Henri-René D'Allemagne: *Les Saint-Simoniens 1827-1837*, Librairie Gründ, Paris (1930), セバステイアン・シャルレティ(沢崎浩平, 小杉隆芳訳): 『サン=シモン主義の歴史』, 法政大学出版局, 東京(1986)

*7 青年共和主義者については、以下の論文を参照。稲生永: ブーザンゴ考—七月革命前後のヒッピーたち, 現代文学, 4, 70-88 (1971), 稲生永: フランス—一八三〇年代のヒッピー群像, ユリイカ, 10, 160-172 (1978)

*8 この中では、サンドが人形劇の衣裳を作ったことについての書簡が知られており、リュバンは、書簡集21巻(1866年6月-70年3月の書簡所収)の特徴として挙げている。

書簡集にみるジョルジュ・サンドの衣生活

いが、彼女の書簡の中では小さな割合でも、価値を見落としてはならないものである。なぜなら、これらの書簡が、先述したサンドの共和主義者としての一面やサン=シモン主義との関係の一端、他にも、1840年に彼女が著した『フランス遍歴の修業職人』のモデルとなった労働者作家アグリコル・ペルディグエ（1805-75）の妻リズを始めとするお針子や仕立屋たちとの交流などをさらに知る機会を与えてくれるからである。ここでは、サンドが衣服に関して述べた書簡の大半を占める女性服に関するものを扱い、書簡からわかる彼女の普段の装いにおける好みや持つ雰囲気と男装との関係を明らかにする。

サンドが女性服に関して述べた書簡には、二つの特徴が存在する。一つは、流行の変遷、既製服や百貨店の出現による衣類購入方法の変化など19世紀の社会事象が数多く映し出されていることである。例えば、1868年5月18日の書簡において、彼女は、当時の流行である日本趣味の装いを「本当に醜悪なもの」¹⁹⁾と嫌悪し、スカートの後ろ腰に腰当てで膨らみをもたせるバスルススタイルに対して、「私は、それを絶対にしないで済ませたいのです。バスルスは醜い」²⁰⁾と述べ、かご型スカートのクリノリンの衰退でもたらされた変化を受け入れられないでいる。また、69年4月27日の書簡では、「あらゆる好みに向けてのものがあ、り、とても便利なことに、仕立屋なしで新しい服を着られ、欲しい物をその場で選べます」²¹⁾と既製服の利便性をサンドは述べ、百貨店での万引き事件について「上流階級にとって、店での万引きは大変な流行です」²²⁾というフロベール（1821-80）の言葉を伝えている。

もう一つの特徴は、「その簡素さや衒いのない良い雰囲気」が、特に気に入っています²³⁾や「私の簡素の習慣において」²⁴⁾などの記述からもわかるように、サンドが、簡素 *simplicité* な装いを追求し続けた態度と「流行に対して注意を怠らない」²⁵⁾様子とを把握できることである。彼女の具体的な嗜好は、布見本のやり取り、料金とデザインの指示、1860年1月30日の書簡²⁶⁾のように幅や柄をわかりやすく示すために描いた絵を通して、一層明らかとなる。注文の仕方の一例を挙げると、「ポプリン織りのドレスにできる限りで最も似合う色の羊毛の編み紐を約1センチ幅で、4メートル買って下さい…この羊毛の編み紐は、ドレスの裾を縁取るためのものです。その部分は地面と接触し、小石や棘、実生活でよく逆立っています」²⁷⁾、「送った

布見本は、ショセダントンの店のものです。56フランで12メートル分になります…同じ値段で、黄色と黒色のチェックのものが大変気に入りました。でも、私がイタリアに行ったら、このオーストリア色のために、非難されたことでしょう」²⁸⁾といったものなどがある。この時代、真のお洒落で、優雅な申し分のない女性は、装いの中に簡素を備えていることが必須の条件とされてはいたが⁹⁾、全生涯にわたって、サンドが装いにおいて最高の価値を置き、流行りものの中にもその必要性を説いた彼女の簡素とは、どんなものなのであろうか。

サンド自身の言葉から知ることができる簡素な装いとは、文字通り、贅沢や華美を嫌い、娘が勤めるような野放図な贅沢ではないもの、見栄を張らないもの、自分の立場や年齢、品位に相応しいものである。「衣服の簡素さは、青年期の慎み深さに合う」²⁹⁾とも彼女は述べている。ただし、サンドの場合、思春期に男装を勧めた家庭教師の特殊な教育が、衣生活の根源に作用している。サンドが、「思いがけない状況により、他の女性たちとは少し異なってもたらされた教育が、私の存在を変えた」³⁰⁾と述べた教育の影響で、「装いへの愚かな虚栄心」と「全ての人々に気に入られたいという不純な欲望」を彼女は持っていなかった³¹⁾。サンドの装いは、見栄を張りたい、皆に好かれたいなどの思いに支えられたものではないのである。1838年3月24日の書簡には、「私の女性としての装いは、男性に媚を売るものではありません」³²⁾という記述も存在する。

マレは、簡素を快適さ、実用性、慎ましさと結び付け、サンドが装飾りや流行りもので複雑に着飾るのを嫌悪したことや活動的な生活をもたらずドレスを必要としたこと、贅沢な装いで、貧しい人々を不快にさせたくなかったことが、彼女の簡素な装いの動機を成していると指摘する³³⁾。確かに、サンドは、1848年3月中旬の書簡で、歩きやすくするため、スカート丈を短くして、広がりを抑えるなどの機能面について触れ³⁴⁾、59年4月6日のものでは、フリルやチェック模様を嫌悪している³⁵⁾。

しかし、サンドの簡素な装いは、虚栄心のない、媚

*9 19世紀における女性の簡素な装いについては、次の書物に詳しい。フィリップ・ペロー（大矢タカヤス訳）：『衣服のアルケオロジー 服装からみた19世紀フランス社会の差異構造』、文化出版局、東京、181-192（1985）

を売らない、気取らないことに最も由来すると思われる。先述したことに加え、1830年4月3日の書簡において、彼女は、「良い着こなしは、装いの取るに足らない気取りとは大変異なったものであると感じました³⁶⁾」と述べている。また、流行りもので複雑に着飾ることをしないのは、快適さや実用性のためというよりも、「申し分のない女性たちは、地方にもたらされ、良い趣味の人の目には大変滑稽に映る極端な流行りものを身に着けていませんでした³⁷⁾」との認識を持っていたからである。

最後に、気取りや虚栄心のない、媚を売らない普段の簡素な装いや雰囲気、いかにサンドのパリでの男装を助けたかを示しておく。男装して全劇場の平土間を訪れ、彼女は以下のように述べている。

誰も私に注目せず、変装にも気付かなかった。造作なく男性服を着ている上に、洒落つ気のない服装や容貌が、全ての疑いを逸らしていた。視線を集め、捕らえておくには、非常に悪い着こなしで、あまりに気取らない（いつものぼんやりして、喜びで呆然とした）雰囲気だった。女性たちは、劇場でさえ、変装する術をほとんど心得ていなかった。彼女たちは、細いウエスト、小さな足、愛らしい動作、眼の輝きを犠牲にしたくないのだ³⁸⁾。

サンドは、女性服の流行やお洒落で優雅な女性がどのようなものであるかを理解する一方で、男装という手段を用いたため、何を犠牲にすれば男装が上手くいくかを知っていた。それと同時に、気取りや虚栄心のない、媚を売らない普段の簡素な装いが、彼女が男装した際、女らしさや女性性を表出させないことを巧みに助けていたのである。

5. おわりに

男性として独立することへの願望や女性の奴隷状態からの解放とサンドの男装とを関連づけるモロワの言説を始めとして、「サンドはフェミニズム運動の先駆者であった。彼女の男装もその文脈をはずしては考えられない³⁹⁾」、「男装の作家サンドの場合にはあきらかに「女であること」への異議申し立てがあり⁴⁰⁾」などの記述からもわかるように、サンドの男装に女性解放思想を探り、男女同権と結び付けようとする傾向がある。直接的には結び付けていなくとも、彼女の男装が女性解放思想を投影していたことを期待する論調は多い。実際、サンドが共和主義者としての政治活動に男

装を活用し、女性の出入りが禁じられている場所に入りしたことは、そのような側面を裏付けるものであろう。しかし、サンドの男装から女性解放思想だけを安易に読み取ろうとする行為に対しては、彼女の衣生活全体を考察した後では、慎重にならざるをえない。

書簡集からは、サンドの日常的な男装について、男性と同等の権利を主張するため、男性の模倣を懸命に行ったことを意味するような内容は、少なくとも見出せず、女性性を表出しないことを目的とし、女性性についての詳細な知識に支えられていたことが明らかとなる。その意味では、気取りや虚栄心のない、媚を売らない普段の簡素な女性としての装いの延長線上に、彼女の男装を位置付けられるのである。

引用文献

- 1) Karénine, W.: *George Sand sa vie et ses œuvres 1804-1876 I-IV*, Librairie Plon, Paris (1899-1926)
- 2) Maurois, A.: *Lélia ou la vie de George Sand*, Hachette, Paris (1952); アンドレ・モロワ (河盛好蔵, 島田昌治訳): 『現代世界文学全集 29 ジョルジュ・サンド』, 新潮社, 東京 (1964)
- 3) *ibid.*, 49
- 4) *ibid.*, 103
- 5) 池田孝江: 『ジョルジュ・サンドはなぜ男装をしたか』, 平凡社, 東京 (1988)
- 6) Sand, G.: *Correspondance t. 1-t. 25* (Éd. de Lubin, G.), Classiques Garnie, Paris (1964-1991); Sand, G.: *George Sand Correspondance Suppléments (1821-1876) t. 26* (Éd. de Lubin, G.), Du Lérot, Tussan (1995)
- 7) Sand, G.: *Œuvres autobiographiques, Histoire de ma vie II* (Éd. de Lubin, G.), Gallimard (Bibliothèque de la Pléiade), Paris, 118 (1971)
…pour n'être pas remarquée en homme, il faut avoir déjà l'habitude de ne pas se faire remarquer en femme.
- 8) Sand, G.: *Œuvres autobiographiques, Histoire de ma vie I, II* (I 1970, II 1971), *op. cit.*
- 9) マックス・フォン・ペーン (イングリート・ロシェック編, 永野藤夫, 井本响二訳): 『モードの生活文化史 2』, 河出書房新社, 東京, 222 (1990)
- 10) Sand, G.: *Histoire de ma vie II, op. cit.*, 118
Je raconte là un temps très passager et très accidentel dans ma vie, bien qu'on ait dit que j'avais passé plusieurs années ainsi, et que, dix ans plus tard, mon fils encore imberbe ait été souvent pris pour moi.
- 11) 長塚隆二: 『ジョルジュ・サンド評伝』, 読売新聞社, 東京, 92 (1977)
- 12) Sand, G.: *Correspondance t. 9, op. cit.*, 700-701
…prends ceci pour ma blouse et mon pantalon. Voici le modèle du pantalon. Fais la blouse d'un bon tiers

書簡集にみるジョルジュ・サンドの衣生活

- plus large que les blouses d'homme, même forme, que celle que Lambert t'a montrée...
- 13) Sand, G.: *Histoire de ma vie II, op. cit.*, 117
- 14) Sand, G.: *Correspondance t. 1, op. cit.*, 818
- 15) Sand, G.: *Histoire de ma vie II, op. cit.*, 331
Pour n'être pas remarquée comme femme seule avec tous ces hommes, je reprenais quelquefois mes habits de petit garçon...
- 16) Sand, G.: *Correspondance t. 2, op. cit.*, 889-890
Je viens vous demander une grâce, c'est de ma faire entrer demain à la chambre des pairs. J'avais un billet aujourd'hui. On a refusé ma redingote, je me suis réclamée de vous, calomnieusement et audacieusement. On m'a laissé passer. J'en ferai autant demain, si vous avez la bonté de m'envoyer deux billets. Je n'ai aucun droit à votre bienveillance et pourtant j'ose vous la demander en cette occasion.
- 17) 坂本慶一：『フランス産業革命思想の形成』，未来社，東京，188（1961）
- 18) Sand, G.: *Correspondance t. 2, op. cit.*, 879-880
L'habit que je mettrai pour m'asseoir à mon bureau importe fort peu à l'affaire, et mes amis me respecteront, j'espère, tout aussi bien sous ma veste que sous ma robe. Je ne sors pas ainsi vêtue sans une canne, ainsi soyez en paix. Il n'y aura pas de grande révolution dans ma vie pour cette fantaisie de porter un habit de bousinot quelques jours en passant...
- 19) Sand, G.: *Correspondance t. 20, op. cit.*, 828
On la complique d'un chic japonais qui présente un tas de chiffons et de bouffants, véritablement hideux...
- 20) *ibid.*, 828
Moi je m'en dispense absolument. C'est laid.
- 21) Sand, G.: *Correspondance t. 21, op. cit.*, 430
...il y en a pour tous les goûts, c'est bien commode de se requinquer tout de suite, sans couturière et en choisissant ce que on veut.
- 22) *ibid.*, 431
Il ajoute que le vol dans les magasins est très à la mode dans les hautes classes.
- 23) Sand, G.: *Correspondance t. 1, op. cit.*, 595
...le chapeau qui est délicieux et qui me plaît particulièrement par sa simplicité et son bon air sans prétention.
- 24) Sand, G.: *Correspondance t. 10, op. cit.*, 235
Aie la complaisance de me choisir cela à ton goût et dans mes habitudes de simplicité...
- 25) Sand, G.: *Correspondance t. 18, op. cit.*, 300
J'ai l'œil sur les modes...
- 26) Sand, G.: *Correspondance t. 15, op. cit.*, 671
- 27) Sand, G.: *Correspondance t. 25, op. cit.*, 819
Achète-moi 4 mètres de lacet de laine d'environ un centimètre de large, et de la couleur la mieux assortie possible avec celle de ma robe de popeline...Ce lacet de laine est destiné à border le bas de la robe en dessous pour l'empêcher de se couper au contact du sol, souvent hérissé de pierres et d'épines, de la vie!
- 28) Sand, G.: *Correspondance t. 15, op. cit.*, 676
L'échantillon que je t'envoie, est de la maison de la chaussée d'Antin. C'est dans les 56 f. les 12 mètres. ... J'aimais beaucoup dans ce lot, les carreaux jaune et noir. Mais si j'allais en Italie on me lapiderait pour ces couleurs autrichiennes.
- 29) Larousse, P.: *Grand Dictionnaire de Universel du XIXe siècle t. 14*, Paris, 745 (1875)
La simplicité dans les vêtements sied à la pudeur du jeune âge.
- 30) Sand, G.: *Histoire de ma vie II, op. cit.*, 126
...je voyais bien qu'une éducation rendue un peu différente de celle des autres femmes par des circonstances fortuites avait modifié mon être...
- 31) *ibid.*, 126
Je sentais bien aussi que la stupide vanité des parures, pas plus que l'impur désir de plaire à tous les hommes, n'avaient de prise sur mon esprit...
- 32) Sand, G.: *Correspondance t. 4, op. cit.*, 376
...ma toilette de femme ne ferait pas vivre un chat.
- 33) Mallet, F.: *George Sand*, Bernard Grasset, Paris, 129 (1995)
- 34) Sand, G.: *Correspondance t. 8, op. cit.*, 347
Tu auras soin de tenir ma jupe un peu moins longue et moins ample que ma jupe brune. C'est embarrassant pour marcher.
- 35) Sand, G.: *Correspondance t. 25, op. cit.*, 977
Je n'aime pas les carreaux ni les volants.
- 36) Sand, G.: *Correspondance t. 1, op. cit.*, 624
J'ai senti qu'une bonne tenue était une chose bien différente de l'affectation futile dans la toilette.
- 37) *ibid.*, 624
J'ai vu que les femmes comme il faut ne portaient pas de ces modes outrées qui nous arrivent en province et qui nous rendent si ridicules aux yeux des gens de bon goût.
- 38) Sand, G.: *Histoire de ma vie II, op. cit.*, 118
Personne ne faisait attention à moi et ne se doutait de mon déguisement. Outre que je le portais avec aisance, l'absence de coquetterie du costume et de la physionomie écartait tout soupçon. J'étais trop mal vêtue, et j'avais l'air trop simple (mon air habituel, distrait et volontiers hébété) pour attirer ou fixer les regards. Les femmes savent peu se déguiser, même sur le théâtre. Elles ne veulent pas sacrifier la finesse de leur taille, la petitesse de leurs pieds, la gentillesse de leurs mouvements, l'éclat de leurs yeux...
- 39) 駒尺喜美：『女を装う』，勁草書房，東京，146（1985）
- 40) 山田登世子：『メディア都市パリ』，青土社，東京，294（1991）